

## 学習言語能力を伸ばす日本語指導

### —子どもがつまずく日本語—

小谷博美（創価大学大学院生）

#### 1. はじめに

現在、日本では日本語指導が必要な児童生徒が年々増加をたどっている。日常会話には比較的短期間に不自由しなくなるのに、教科書の内容が読み取れない、教師の説明が理解できるようにならないことが問題となっている。生活言語ができるようになった児童に対して教科内容と日本語指導の統合を目指す JSL カリキュラムが用意されているが、十分に成果が上がっているとは言えない現状がある。学習言語能力は読解力や作文力、発表力、応用力などさまざまな能力を含み、抽象的な思考力や論理力に関わる言語能力である。学習言語が獲得できないと、進学や就職が思い通りにならなくなる。この問題の解決策について、公立小学校で日本語指導が必要な児童の支援をする中で、気づいたこと、考察したことを報告する。

#### 2. 実践の場の特徴

調査対象としたのは横浜市立 A 小学校である。横浜市の外国人住民比率は全体として見れば 3.6%であるが、中には区内人口の 12%を外国人が占める区もあり、年少者日本語教育関係者からモデル地域のひとつとして注目されている地域である。横浜市立 A 小学校は外国籍児童と外国につながる児童が多く、国籍も中国、フィリピン、タイ、ベトナムほか多岐に渡る。児童の来日時期も、日本生まれ、幼児期、小学校になってからと多様である。来日直後から一定期間は取り出し授業や入り込みによる指導が受けられるが、その後は支援も減っていき在籍学級中心での授業となり、在籍学級にも複数人の外国籍や外国につながる児童が在籍する。

#### 3. 実践の目標

初期指導を終え、在籍学級で学びながら支援を受ける児童を入り込み指導を行いながら観察した。ある程度日本語が話せるようになると、教科内容の理解支援と学習に必要な漢字・語彙の指導が中心になることが多い。しかし、現実には漢字や語彙は理解できていても、文章題や長文の問題になると解けないことがある。そこで、児童はどのような日本語につまずくのか、なぜつまずくのか把握し、教科指導と「統合」した日本語指導の在り方を探る。

#### 4. 具体的な実践の内容とその過程

2025年5月から11月までの期間、週に1回（1～6年生までの国際教室計15授業、4～6年生までの在籍学級計18授業うち算数科計12授業、合計33授業）、参与観察を日本語ボランティア支援員の一人として、国語科、理科、算数科の授業を中心に横断的にさまざまなクラスで取り出しや入り込み指導を行った。日本語支援が必要な児童の隣で、教諭の指示や説明、あるいは教科書の文章が十分に理解できていないと思われるときに、授業内容の理解を補う活動をした。その際、児童がつまずく箇所や教師と児童とのやりとり、その時の児童や教室の様子や状況など

を記録し分析した。集めたデータのうち、今回考察対象として選んだのは、小学校4～6年生の在籍学級の児童、教科は算数科である。認知能力が急速に発達するようになるのは9～10歳ごろとされており、学習言語能力の獲得にとって重要な学年である。また算数科は国語や社会などの科目と比べて言語障壁が低く、論理的思考を必要とする科目だからである。支援した児童の国籍は中国、フィリピン、パキスタンなどであるが、日本滞在歴はさまざまに来日時期が1年未満の児童もいる一方で、日本生まれの児童も含まれる。

実際に児童がつまづいた文章題のうち二例を挙げる。

- ① 「たて12 cm、横18 cmの長方形の中に、合同な正方形の紙をしきつめます。すきまなくしきつめられるのは、正方形の1辺の長さが何cmのときですか。」
- ② 「1、2、3の数字を1回ずつ使ってできる3けたの整数のうち、いちばん大きい偶数はいくつですか。」

清水美憲・真島秀行ほか（2025）『新編新しい算数5上』

いずれも5年生の教科書に出てくる文章題である。「しきつめる」「すきまなく」「整数」「偶数」などの語彙を理解する必要はあるが、語彙の意味が理解できても問題が解けない児童がいる。「ずつ」や「うち」など文型に関わる用法の理解度が影響するが、問題が解けない理由は文の構造にあると考えられる。①は「～のは」を使用した分裂文になっている。②は名詞修飾節が使われている。学習支援の際は、これらの文章題を単文や、やさしい日本語にしたり、わかりやすい具体例を挙げたりして、児童は内容を理解できた。しかし、こうした表現は教科書の文章や教師の説明の中にも頻繁に出てくるので、習得しておく必要がある。

## 5. 結果と考察

収集したつまづき事例に共通するのは、文の構造に関わるもの、特に複文である。複文には名詞修飾節や条件表現などいろいろあるが、成人留学生対象の日本語教育でも大きな壁となる部分である。これらの表現は学習言語の基礎となる認知能力や論理的思考と深く結びついており、複文をはじめ文の構造に関わる多様な表現形式を使いこなせるようにすることは思考訓練につながる。言語によって鍛えられた思考力が、深い学びを可能にするのである。このためには、教科内容の理解や漢字・語彙の記憶にとどまらず、より高度な日本語で語れるようにする指導の工夫が必要となる。機械的な文型練習ではなく、学んだ内容をもとに文脈に合わせて焦点化したり、動詞述語文を名詞述語文に変換したりするような指導が必要である。今回は横断的な調査が中心で、同じ児童に長期間関わることができなかつたために、指導法と言語力の伸びの関係を示す実証的なデータは得られなかったが、具体的な指導案を提示したい。今後は縦断調査によって効果的な指導法を検証することが課題である。

### 【引用文献】

清水美憲・真島秀行ほか（2025）『新編新しい算数5上』東京書籍、pp.102、pp.106